天道

発行日
2021.9.10
発行者
苫小牧市立
ウトナイ中学校
3年4組
TENDOH

乗り越えた山と残された山

ワクチン接種　河野大臣に聞く

国のワクチン接種を担当している河野大臣へワクチンについて取材した。河野大臣は残されている課題があり「若者の認識のそごを改める必要がある」とした。

六月下旬から六十五歳以下の接種が始まり、二回目の接種も進んでいるコロナワクチン。これまでの総接種回数は一・三億回を超えており、中でも高齢者の接種率は九月三日時点で九割を超えている。また国内でも五社が国産ワクチンを開発しており、二〇二二年の実用化を目指している。日本のワクチン接種を急激に進めた河野大臣へ「一番困難だったこと」。また話を伺う中で疑問として生まれた「十～二十代のワクチン接種率を上げる具体的な政策」の二点について詳しく話を伺った。

河野大臣は「ワクチン接種率を上げる政策」を「三つの山」に例えた。一つ目の山が「ファイザー社と交渉する「ワクチンの確保」。二つ目の山が接種を行ってくれる病院などの「人員確保」。この二つについては「乗り越えた山」だという。そして最後に残されている山は「若い年代の接種率を上げること」である。高齢者の接種率は九割を超えているが、例えば広島県を見てみると、若者の接種率は約十%とはるかに少ない。そしてこれはどの都道府県でも同様である。接種が高齢者に比べて進んでいないことも原因として挙げられるが、それよりも若者の間でコロナウイルスに対する認識の「そご」※1により、ワクチンの重要性を軽視する現実があるためである。

若者の認識の「そご」

皆さんはコロナの「軽症」と聞いてどういうイメージを持つだろうか。恐らく大抵の人が「無症状」をイメージし、症状が出ても「鼻水や咳」、「微熱」といった印象を抱くだろう。しかし現実はそれ以上に悲惨だ。「軽症」を体験した人は、「四十度前後の発熱」や「人生で経験したことのない倦怠感」といった症状が出ている。中等症は酸素投与の必要な状態を指すため、このような重い症状でさえも「軽症」に分類されてしまう。河野大臣も「これが軽症なのかと思うものも分類されていた」と語った。このような、「そご」が広まってしまった結果、多くの人が「自分は大丈夫だろう」という思考に陥ってしまい、ワクチンの重要性に気づけないのである。

現状を解決するために河野大臣は「十～二十代のワクチン接種率を上げる具体的な政策」として、同年代から接種の呼びかけを行うと述べている。実際に吉本興業の人気タレントらを活用した呼びかけを行っている。国の最前線で戦っている河野大臣。特に熱心に語っていた認識の「そご」。我々若者はコロナウイルスに対するイメージを改めて考え直し、SNSを用いてワクチンの接種を呼びかけるなど、若者が若者に「拡散」していくことが必要でないだろうか。

※1 そご…物事がうまくかみ合わず、食い違うこと。

駅前再開発に迫る

苫小牧駅南口を出た先に見える大きな黄色いビル。エガオビルだ。これは一九九七年に建設された。もともとは、「ダイエー苫小牧店サンプラザ」が入っていた。駅前という立地のためとても栄えていたが、二〇〇五年に撤退。翌年、二〇〇六年には、「苫小牧駅前プラザエガオ」が開店した。しかし、二〇〇五年に「イオン苫小牧」がオープンしたため、人はイオンへと流れていき、エガオビルは二〇一四年に閉鎖、廃ビルと化した。（表一）

そんな中、苫小牧市はビルを解体し再開発を進めようとした。土地の無償譲渡を権利者に呼びかけ、大東開発を除く二十八の権利者から寄付を受けた。大東は土地の約十六%を持っていて、こちらは、単独で再開発を進めようとしている。両者は、今もこの土地をめぐり争っている。両者がどんな再開発を目指しているのか苫小牧市まちづくり推進課の長谷川さんと、大東開発代表取締役の三浦社長へ話を伺った。

市が再開発を進める際は、民間に依頼する形をとる。もし再開発が実現した場合、長谷川さんは「市民会館や高層ビルが建てられ、JRと連携し苫小牧駅のリニューアルがされる可能性がある」と述べた上で、「建物の老朽化が進んでいるため、早期に解決したい」と語った。

対して大東は、古くからこの土地を所有しており思い入れがある。もともとは三星の土地であり、三星とは半世紀にも渡り深い関わりのある大東は、「ここだけは義理があり譲れない」と述べている。そのため市とは別に再開発を進めたいとし、「円満に共存できる道を選びたい」と語った。

エガオビルが建設されてから四十四年、閉鎖されてからは七年。建物の老朽化も進んでいる。そんな中での両者の対立。駅前に活気を取り戻すためにも早期の解決を願う。

（表１）

1977
サンプラザ開店
⇩
2005
「ダイエー」撤退
「イオン苫小牧」開店
⇩
2006
「苫小牧駅前プラザegao」へ改名
⇩
2014
egaoビル閉鎖

教訓を未来へ

「地震が発生してから、津波が来るまで三十分あった。その三十分で近くの山に逃げれば全員が助かったはず。津波なんて死亡者〇で当たり前なんだよ。だって高いところに逃げればいいだけなんだよ。だから悔しい」。これは実際に被害にあった方が震災学習の際、私達に語った一言である。十年の歳月を経ても多くの人を苦しめている東日本大震災。実は震災の二日前にも大きな地震があり、大津波警報が出たが津波は来なかった。だから今回も大丈夫と思い、その日も避難しなかったそうだ。そのため一万五千人以上の被害者が出てしまい、今でも約二千人以上の方々が見つかっていないままだ。実際に被災した町を見てみると、学校は津波が来てもすぐ分かるようにガラス張りになっていたり、家を前よりも高い場所に建てたりするなどの工夫があった。だが、地元の方々は何もかも新しくなってしまった町を受け入れられずにいた。これらのことを私達は忘れてはいけない。震災学習の最後に、私達に語ってくれた言葉でコラムを締めようと思う。「私達がこの話をする理由は暗くて辛い過去に同情してほしいのではなく、自分達の身を守るために震災の恐怖を知ってほしい。また震災が起きた時、次こそは被害者を〇にできることを願っている。」

私達の「声」

VOICE

大きな社会問題を解決するためには、一人一人が身近な問題を見つけ声を上げ、問題提起していくことが重要である。

二〇〇六年、静岡県静岡市議会で「歩きたばこ」を規制する条例が制定された。この条例ができたのは、喘息を持つ中学校一年生の声がきっかけであった。中学生の声が周囲に影響を与え、大きな話題となることで、結果的に二万四千筆もの署名が集まって条例ができたのだ。この例はたとえ中学生であっても身近な問題を見つけ、声を上げて周りに問題を提起することで、住みやすい街を自分たちの手で、作っていくことが可能であることを示している。

しかし一部の人は、このような例を示しても否定的な感想を抱く。「中学生の私たちが言ったって何も変わらないだろう」「どうせ無理だ」、そのように思っていては社会は変わらない。問題は誰かの声がきっかけとなり解決に向かうのである。

社会問題は中学生自身が声をあげることで変えていけると考える。苫小牧市にも通学路に吸い殻が落ちていたり、収集日ではないゴミが収集所に置かれていたり、様々な問題がある。住みやすい街を自分たちの手で作っていくためにも私たちが率先して声を上げていくべきではないだろうか。

ファームソレイユ リニューアルオープン！

私達は七月三十日にリニューアルオープンしたファームソレイユへ取材を主に移転の理由と前の店舗との違いについて話を伺った。「元々はイオンの近くにあり、建物が古く狭いなどの問題があった」と語る。お客様からも「住宅地と離れていて足が向かなかった」という声があった。リニューアル後はより住宅地に近くなり、店内も広く明るくなった。お勧めの新商品はジェラートやソフトクリーム、そして米粉で作るバームクーヘンである。取材の最後に、「広く明るく新しいお店にいる時間を楽しんでほしい」と笑顔で語る店員さんが印象深い。店内や雰囲気、商品も変わったファームソレイユ、ぜひ行って見てはどうだろうか。

編集後記

今回の壁新聞ではひたすらに「面白くしたい」の一心で制作してきた。実際、国の中枢を担う大臣に自ら取材する中学生など、後にも先にもいないだろう。このような新聞を作成でき、嬉しく思う。

本新聞の制作に協力してくださった方々、本当にありがとうございました。

オリジナル　S　106